

平成26年3月1日

会員各位

協会だよりー255(3月号)

JCRA (Japan Catalyst Recovering Association)

触媒資源化協会

トピックス

- 第29回JCRA会
開催日：平成26年4月3日（木曜日）、開催場所：中山カントリークラブ
出席者：16名（4組）・・・現在フルエントリーとなっています。



- 一．協会よりのお知らせ
【実施済事項】
- 二．第220回月例会が終わって
【予定事項】
- 三．事務局より 三年度の予定
- 四．【雑学】鹿島紀行（鹿島詣）バスの旅
（芭蕉の足跡をたどる）

1. 協会よりのお知らせ

【実施済事項】

- ① 協会だよりー254（2月号）をメール&郵便で送信（1/31）
- ② 第220回月例会（講演会・新年会）
日時：平成26年2月6日（木）13:30～19:00
場所：エッサム神田ホール
講演：i. 「化学物質等の安全管理の推移」
環境技術・健康安全研究所 遠藤新治郎氏
ii. 「燃料電池改質技術の新展開」
㈱ルネッサンス・エナジー・リサーチ 岡田 治氏

【予定事項】

- ① 第六回運営委員会
日時：平成26年3月20日16時00分～
場所：堺化学工業㈱東京支店会議室
出席：運営委員、第20回月例会幹事、専務理事

議題：平成26年度（第39期）月例会の検討、第20回月例会の総括、第221回月例会の準備

② 第一回調査・技術委員会

日時：調整中

場所：調整中

出席：各部会長、委員長、専務理事

議題：2013年実績の編集、検討

③ 第一回広報委員会

日時：平成26年3月11日11時00分～13時00分

場所：ジョンソン・マッセイ・ジャパン会議室

出席：広報委員、専務理事

議題：新委員の顔合わせ、広報方針、他

2. 第220回月例会が終わって

2月6日木曜日、13時30分より、エッサム神田ホール601号にて講演会・新年会が行われました。講演は環境技術・健康安全研究所・所長 遠藤新治郎氏による環境のお話と（株）ルネッサンス・エナジー・リサーチ・社長 岡田 治氏による燃料電池のお話でした。出席者は60名に達し熱気溢れる勉強会と成りました。講演会終了後、16時30分より同場所にて立食による新年会が行われ、三浦章協会長の挨拶、経済産業省製造産業局化学課・課長補佐岩田寛治様より来賓のご挨拶をいただき、会員会社の繁栄を祈念して細田顕治協会副会長の音頭で乾杯、和やかな歓談とともに交流が行われました。



3. 事務局より (3月度の予定)

月	火	水	木	金	土
3	4	5	6	7	8
×	○	○	○	○	×
10	11	12	13	14	15
×	第一回広報委	×	×	○	×
17	18	19	20	21	22
×	○	×	第六回運営委	春分の日	×
24	25	26	27	28	29
×	○	×	×	○	×
31	4/1	4/2	4/3	4/4	4/5
×	○	○	第29回コンペ	○	×

3月度の出勤予定：10日間

4. 【雑学】鹿島詣（鹿島紀行）バスの旅

日本歴史大辞典によると、芭蕉さんは1687（貞享4）年8月に曾良、宗波を従へ江戸を出発して15日の中秋の名月を常陸国鹿島で眺めんと、鹿島の根本寺には旧知の仏頂和尚がいたのでこれを訪ねたとの解説（上野洋三）があります。芭蕉さんは更科紀行の姨捨の名月を見ようと旅をしていますが、特別、中秋の名月が大好きな方なのですね。

芭蕉さんは深川の芭蕉庵近くの小名木川より舟に乗り、江戸川を経由して行徳の新河岸に到着しました。行徳からは徒歩にて

きおろしかいどう
木下街道を八幡、鎌ヶ谷を通り現在の我孫

子市布佐に着きました。布佐からは又舟で利根川を下って鹿島に向かったようです。その時の鹿島詣の行程図を示します。

江戸時代は成田山詣でや鹿島詣でのルートとしては行徳まで舟で行くのが、ごく一般的な方法であったようです。また銚子の魚や味噌醤油、利根川の鰻や奥州の米の物資輸送ルート、醤油の製造のために行徳の塩を銚子に運ぶ道としても重要なものでした。

現在の東京都中央区小網町と蠣殻町の間には箱崎川（運河）が流れていて、行徳へ行く定期便（舟）の発着場がありました。ここを行徳河岸と呼んでいました。今では箱崎川は既に埋め立てられて頭上に首都高が通り、箱崎のインターの場所となっています。日本橋小網町3-17 近仁ビル前の歩道脇に行徳河岸があった謂れの中央区教育委員会の説明板が立っています。ここ小網町にはヤマサ醤油の東京支社、ヒゲタ醤油の本社が有り、江戸時代より醤油工場のある銚子と行徳河岸の結びつきが密であった事が偲ばれます。

さて1月14日、私たちのバスは、上野を7時30分に出発して、最初に市川市行徳に向かいます。京葉道路を通過して8時過ぎには行徳・法善寺に到着です。



《仏性山法善寺》千葉縣市川市本塩1-25

行徳は本塩、富浜、入船、塩焼などの地名（市川市）に残っているように塩田法による塩の大産地でありました。寺の場所は今では海岸線から離れていますが、江戸時代は砂浜だったのでしょうか。法善寺の境内には、本寺を開基した宗玄和尚が、この辺りが海岸に面しており荒地ではあったが、土地の開拓を初め、塩田を作って製塩の方法を村人に教えた謂れの市川市教育委員会の説明板があります。このことから俗にここ法善寺は『塩場寺』と呼ばれていました。本堂前には芭蕉さんの句碑『うたがふな潮の華も浦の春』（いつを昔・元禄二年）があり『潮塚』と呼ばれています。この句は二見が浦の夫婦岩の図の画賛といわれています。岩に砕け散る潮を花と見立てて、二見が浦の春景色はこれだ、疑うなよと言い切っています。



Fig.2 新編日本古典全集71（小学館）より



法善寺を出て行徳街道を散歩すると暫くして塩田の所有者であった旧田中邸があります。その玄関脇に芭蕉さんの句碑が建立されています。市川市のホームページによりますと、この田中邸は、福沢諭吉の門下生で、元行徳町長を務めた先々代の栄次郎氏が明治初年に建てたことが紹介されています。田中邸の道路の反対側 100mほど先には、笹屋うどん店跡の標識が立てられています。



月はやし 枯梢は雨を 待ちながら
(貞享4年 鹿島紀行・根本寺にて詠んだ句)



【笹屋うどん跡】

本行徳の笹屋は、江戸時代うどん屋として繁盛した店でした。船着場近くに位置していたため立寄る旅人も多く、紀行文などにも記されています。
市川市教育委員会

旧江戸川（江戸時代はこちらが本流でしょう）の堤防脇には、行徳新河岸の常夜灯があります。新たに整備されていますので元の場所では無いかもしれませんが。市川市のHP紹介によると、成田山参詣が盛んになり、常夜灯のある船着場は賑わいを極めた。文化9（1812）年には、江戸日本橋西河岸と蔵屋敷の講中が行路の安全を祈願してこの常夜灯を新勝寺に奉納した。と紹介されています。

明治時代に入っても、行徳新河岸は蒸気船の発着場として栄えていましたが、明治30年（1897）東京と千葉を結ぶ総武鉄道は水運で栄えた（鉄道の通過に反対していたといわれています）行徳地区を避け、内陸を通り小岩・八幡・舟橋を経由し建設されました。行徳は鉄道から見放されたため、昭和44年（1969）営団地下鉄東西線が全線開通するまで一時寂れてしまいました。船運で栄えた当時の行徳新河岸（旧江戸川）は現在、堤防が嵩上げされたスーパー堤防になっています。この常夜灯は市川市の有形文化財（昭和35年10月7日指定）となっており、平成21年（2009）現在地は常夜灯

公園として整備されました。

《常夜灯公園》千葉県市川市本行徳・行徳新河岸跡



常夜灯公園のある旧江戸川は川幅も広く、対岸は東京都江戸川区の東篠崎辺りとなり王子製紙江戸川工場、都下水道局篠崎ポンプ所などが望めます。

芭蕉さん達は、江戸より、ここ行徳新河岸までは舟で来ましたが、現在の我孫子市布佐（利根川の船着場・木下河岸）まで木下街道（現 59 号）を徒歩にて旅をしました。銚子や鹿島へ向かうには布佐より利根川を通る船便を利用するためです。私たちはバスに乗り、59 号を JR 成田線の木下駅方面の布佐に向かいます。京成中山を横切り、中山競馬場、鎌ヶ谷大仏脇を通過、白井市を通りやっと到着です。木下街道は片側一車線の所が多くて交通量が半端ではありません。

《木下河岸跡》千葉県印西市木下《生（鮮魚）街道》千葉県我孫子市布佐



木下河岸は、利根川を下って香取・鹿島・鳥栖の三社を参詣し、銚子の磯めぐりを楽しむといった

木下茶船の発着場でありました。寛政初め(1789)頃には、年間4500艘前後の出船が見られ、1万7000人程度の乗客があったといわれています。

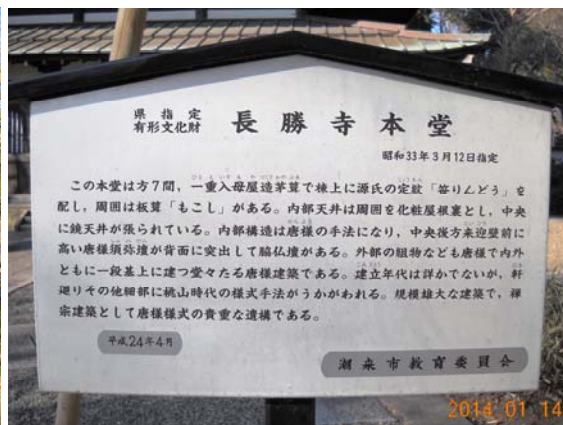
5～7月を除く期間、銚子で水揚げされた鮮魚は、ここ布佐・木下の河岸まで船で運ばれ、陸揚げされて馬に積み替えて、陸路、木下から行徳へ(行徳みち)、布佐から松戸へ(松戸みち)送られ再び船に積み替えられ日本橋へ送られていました。銚子で夕刻に出発した鮮魚は翌日の夕刻から夜に日本橋に到着したそうです。そのため、この陸路は生(鮮魚)街道と呼ばれていました。

日本橋魚河岸は江戸時代から明治、大正まで(90年前まで)長年使用されていましたが、大正12年(1923)の関東大震災で壊滅し、日本橋区築地の居留地跡に臨時の魚河岸として移設され、昭和10年(1935)現在の築地に東京市中央卸売市場として開設され現在に至っています。今後さらに中央区築地より江東区豊洲に移転する準備が進んでいます。

布佐より栄橋を渡り茨城県に入ります。利根川に沿ってバスは潮来へと向かいます。

《海雲山長勝寺》茨城県潮来市潮来428

源頼朝が文治元年(1185年)、鹿島に隣接するこの地に武運長久を祈願して創建したと伝えられています。臨済宗妙心寺派に属し海雲山と号する古刹です。



時雨塚

旅人と 我が名呼ばれん 初し
ぐれ はせお翁

(貞享4年 笈の小文)

連句碑

塙せよ和ら本す宿の友すゞめ (松江)
あきをこ免たるく年の指杉 (桃青)
月見んと汐引のぼる船とめて (ソラ)

貞享4年(1687年)8月15日、芭蕉は根本寺の佛頂和尚を訪れた。月見のあと鹿島神宮に詣で、帰路潮来の医師本間自準亭に泊まった



《本間自準亭跡》茨城県潮来市



本間道悦(自準)、寛永14年(1637年)、15歳の時に島原の乱に出陣するが負傷、医師となり大垣藩の藩医となる。江戸に出て俳諧を志し、松尾芭蕉と親交を結ぶ。俳号は松江。芭蕉に医術を教えたという。延宝10年(1682年)、潮来に退き診療所「自準亭」を開く。奥の細道で芭蕉さんが酒田、高田にて医師宅にお世話になったのも自準の紹介とも言われています。芭蕉さんは根本寺で仏頂和尚と再会して月見の句会を催した後、自準亭に宿泊して、連句会を松江(自準)、曾良と3人で催しました。その連句碑が先に紹介した長勝寺の境内に建立されています。自準亭跡は標柱が残るのみで住地は他人の住まいとなっています。

《鹿島神宮》茨城県鹿嶋市宮中 2306-1



神宮の大鳥居は、3.11の東日本大震災で倒壊したままで再建されていません。私たちは楼門を通り先ず拝殿にお参りします。拝殿手前には芭蕉さんの句碑があります。



名月や 鶴脛高き遠千潟 はせを

奥参道を通して奥宮近く of 芭蕉さんの句碑見学です。境内は静寂で、数ある神社の中でも別格です。



この松の^{みばえ}実生せし代や 神の秋

「神前に鬱蒼とした老松がそびえていて、この松が実生えしたであろう神代のことが遙かに思いやられる」の意。今では、松は見当たりません。枯れてしまったのであろうか。回りは杉ばかりと碑の前の売店の女性は言っていました。

大鯰が大石で抑えられているという謂れの要石へ向かいます。要石は頭だけが僅かに露出している霊石。鹿島神宮の大神が降臨した御坐とも、地震を起こす大鯰の頭を押さえている鎮石とも言われています。水戸光圀が家来に七日七夜、夜どうし掘らせてけれども掘りきれなかったとの謂れが残って

います。要石の手前には、石材会社の社長の奉納で、大鯰を押さえつけている大神の彫刻が建立されています(左の写真) 右の写真は頭が僅かに見える要石です。



枯枝に 鳥のとまりたるや 穂の暮

《根本寺》茨城県鹿嶋市城山



鹿島紀行での芭蕉さんの最大目的である仏頂和尚との再会。舞台は根本寺。芭蕉さんが深川・臨川寺で禅の指導を受けた仏頂和尚が勤めていた根本寺。境内には鹿島紀行で詠んだ月見の句、二句の句碑が建立されています。後の奥の細道で、黒羽の雲巖寺を訪問、仏頂和尚が修行した草庵を訪ねています。



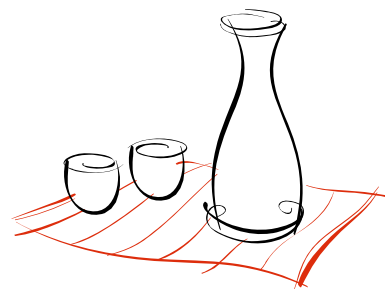
左：月はやし 梢ハ雨を待ちながら



右：寺に寝てまこと顔なる月見哉 はせを翁



根本寺に別れを告げる頃、冬の日暮れは、あっという間です。17時前ですがすっかり暗くなってきました。今日の鹿島紀行の勉強は是まで、最終のコースは酒蔵見学です。愛友酒造㈱ 茨城県潮来市辻 205 で地酒の試飲会となりました。えいやのかけ声で大樽鏡開きの皆さん。樽酒を杓にて試飲の後、大吟醸、純米酒、おつまみなどを購入して愛友酒造に別れを告げ、東関東自動車道、湾岸高速を経由して上野を目指します。道路は順調で19時過ぎには上野へ到着となりました。



【文責・専務理事】